

## 昭和57年度鹿児島県考古学会総会

昭和57年6月27日(日) 於鹿児島大学法文学部103号教室

## 1. 会活動報告

毎月第4日曜日 河口会長宅にて月例勉強会

## 2. 会長・副会長改選

再選 会長・河口貞徳、副会長・本蔵久三

## 3. 秋季大会について

大島郡笠利町歴史民俗資料館開館に合せ鹿児島県考古学会秋期大会を10月17日(日)に

## 4. 発表要旨

## 1. 縄文時代の集落移動—鬼界噴火前後—

池畠 耕一

約6,300年前、硫黄島・竹島あたりにある鬼界カルデラで起った噴火は100km<sup>2</sup>を越す多量の火山灰と軽石等を噴出するとともに、高温の火碎流は海を越えて本土にも至った。その時の火山灰の厚さが50cmを越す地域は九州中・南部、

四国、山陽、紀伊半島、四国南方の海底というきわめて広い範囲におよび、灰のみられる所は佐渡島、関東北部まで広がる。噴火の影響は火碎流・降灰だけでなく、津波・地震・山崩れ・土石流等となって、地表の姿を大きく変える。大隅・薩摩半島

では緑がほとんど失われるため、植生が回復し、浸食・堆積による地形変動が一応落ち着くまでに100年以上、極相林が成立し、土壤のA、B、C、3層が形成されるまでにはまず1500年ほどの年月を要するという。(町田:1982)。

当時、この付近に住んでいた人間さらには動物達までが影響の少ない地域へ大移動したであろうことは想像に難くない。最近の調査によってこの火山灰を境に上下に大きな土器型式の差があることが指摘されている(新東:1978)。つまり、鹿児島

県では下下塞之神式土器以前が、上

	塞之神	轟	曾畠		塞之神	轟	曾畠
長崎	3	7	32	韓国	1	1	1
佐賀	1	5	23	島根		2	
福岡	5	22	41	広島		1	
大分	12	15	9	山口		6	4
熊本	40	47	73	愛媛		2	
宮崎	8	3	8	沖縄		3	3
鹿児島	118	84	76	計	188	203	270

県別の各土器型式の出土遺跡数

地 域			塞之神	轟	曾畠
南 薩	錦江湾西岸		4	4	6
	南岸		8	8	9
	内陸部(知覧・川辺)		20	1	5
	吹上浜沿岸		8	9	5
北 薩	西岸		7	3	5
	内陸部(大口・伊佐・姶良)		30	23	19
	錦江湾奥部		5	3	1
	〃東岸		0	3	2
隅	内陸部(財部・末吉・大隅)		5	3	1
	志布志湾岸		13	13	4
	南島 種子島・屋久島・奄美大島		18	14	19
計			118	84	76

鹿児島県内の地域別土器型式出土遺跡数

に壺式土器以後のものが出土する。

表にみるよう鹿児島県、特に内陸部では塞之神式土器の出土遺跡数に比べて、壺式土器の出土遺跡数は激少しており、増加傾向にある他県との違いが表われている。生活様式においても壺式土器の時期には盛んに貝塚がつくられるように、海への依存度が強まる。このことは植生の荒廃による食生活の変化が要求された結果であろう。

塞之神式土器も細分化によって地域性のあることが指摘されている（多々良：1980）。今度は壺式土器も細分化を試みることによって、綿密に鬼界噴火前後の様相を比較すれば、人々の動きがより一層明白となるであろう。

町田洋「火山活動」『縄文文化の研究』1（縄文人とその環境） 1982年 118P～125P

新東晃一「南九州の火山灰と土器型式」『どるめん』19号 1978年

多々良友博「輪野尾採集の塞ノ神式土器」『鹿児島考古』第14号 1980年 79P

## 2. 田中堀遺跡の調査概要（第1, 2図参照）

本田 道輝

田中堀遺跡は、川辺郡川辺町上山田字田中堀に所在する縄文後期を主体とする遺跡である。かつて、この遺跡より採集された土器類を実見する機会を得たが、それらは指宿式と市来式の古いタイプといわれていたもので、両者の移行を示すようなものもあり、市来式の出現状況を知ることができる遺跡として注目した。近年、一湊松山遺跡（熊毛郡上屋久町）の調査により市来式の祖型式として松山式が設定され、その後、河口貞徳氏は南九州各地の同類土器を提示し、この土器の変遷と南島文化への影響を考察された。筆者は、指宿式・松山式・市来式の層位関係及び型式変化を探る目的でこの田中堀遺跡を選び調査を実施したものである。

調査は、昭和56年12月25日～昭和57年1月7日・10日に実施した。その間、有元彰順氏をはじめ鹿児島大学考古文化人類学専攻生、同考古学研究会OBには終始御協力をいただき、休日を利用して瀬戸口望・多々良友博・成尾英仁の各氏、県文化課職員の各氏にも調査に参加していただいた。また、遺跡について久保春信氏、土器について河口貞徳・三島 格・島津義昭・富田紘一の各先生、各学兄に御教示をいただいている。誌上を借りて深く感謝の意を表したい。

調査は、同一畠地内4地点で行ない、70m<sup>2</sup>の面積となった。地層は各地点で少々異なるが、およそ次の通りである。第1層 耕作土層、第2層 暗黄褐色軟質土層、第3層 暗茶褐色土～黒褐色土層、第4層 明茶褐色粘質土層、第5層 黄褐色パミス混土層（固い）、第6層 紅褐色砂質土層（ヌレシラス）。このうち、遺物包含層は第2層・第3層・第4層であり、第2層最下部で少量の市来式・松山式が、第3層上部で松山式・指宿式、同下部で指宿式が多量に出土している。第4層を掘り込んでの遺構が点在したため、第4層上面で調査は止めた。

この調査によって出土した遺構・遺物は多く、目下整理中であるため、ここでは概略述べることにする。遺物の主体となるのは土器で、特に第3層から多量に出土している。指宿式は、単純な深鉢形が多く、少量の甕形もあり、把手をもつ浅鉢形や脚台も存在する。文様は直線的なものが大半を占め、第3層下部では沈線が太目になる傾向がみられる。数点の磨消縄文と貝殻による擬似縄文